

京都本草学者の園芸 ～水野皓山の日記から～

平野 恵

(台東区立中央図書館専門員)

The Study of the Relationship between Herbal Medicine and Horticulture in the Edo Period

—by the Diary of MIZUNO Kozan(水野皓山)

HIRANO Kei

Taito city Central Library Curator

Abstract

This paper clarifies the meaning of Honzo-gaku(本草学) which is the study of the herbal medicine from a dairy, called *Kozan nikki* (皓山日記) which was written in the 19th century by MIZUNO Kozan, herbalist in Kyoto, studied Honzo-gaku by researching horticulture. He compiled the report of various species of plant in *Kozan nikki*. According to Kozan diary, someone purchased various plant species which were called “Kihin”(奇品) at the plant fair during the Edo period. The plant species included various forms such as seeds, pressed leaves, potted plants, cut flowers, branches and seedlings. At the fair, a study group called “Bussan-e”(物産会) determined the significance of herbal plants as unique art form.

はじめに

園芸と本草学は近い関係であるにもかかわらず、その関連性に言及した論考は多くはない。⁽¹⁾筆者は学者と植木屋を調査することで、学問と技芸が融合した近世学芸史の実態を把握できると考え、19世紀本草学者で園芸要素の強い人物を探していたところ、水野皓山という人物に出会った。著作の

多くは、愛知県西尾市岩瀬文庫に所蔵されており、既にその存在自体は知られつつも⁽²⁾、園芸視点での論考は未だない。本稿では、この水野皓山の日記の分析から、本草学者ならではの園芸の意義を考察していく。

1. 水野皓山について

水野皓山は、小野蘭山(1729 - 1810)の門人である。安永6年(1777)生、弘化3年(1846)没、年70。名広業、字士勤、通称源之進、号を観生堂、陶隠子と称した。京都の医師で、蘭山に本草学を、浅井氏に医学を学び、物産会や関西で長期間存続した研究会「以文会」^{いぶんかい}の活動を知る上でもその著作は貴重である。

本草学研究は、小野蘭山没後200年記念誌編集委員会編『小野蘭山』⁽³⁾によって新たな局面を迎えたといつてよい。本書は小野蘭山の功績を、学問・自然・東西文化交流に分けて論考を載せ、さらに資料編に書簡、門人録、著作、年譜等を盛り込んだ労作である。本書刊行の同年には、西尾市岩瀬文庫で「平安読書室～山本亡羊とその息子たち～」展を開催し、翌年は、練馬区立石神井ふるさと文化館が「江戸時代の百科事始—本草学者小野蘭山の世界—」、武田科学振興財団杏雨書屋が「江戸時代後半期の本草学—小野蘭山—」、さらにまた翌年に内藤記念くすり博物館が「江戸のくすりハンター小野蘭山—採薬を重視した本草学者がめざしたもの—」と、次々と小野蘭山がテーマの展覧会が開かれた。水野皓山についての論考も、平野満が蘭山の塾「衆芳軒」に入る際の例として皓山を採り上げ、⁽⁴⁾太田由佳が松岡玄達、小野蘭山、水野皓山と、師弟関係において連続する書写例として挙げるなど、⁽⁵⁾近年は小野蘭山を軸として研究が展開している。

本稿では、数多い水野皓山の著作から、西尾市岩瀬文庫所蔵の皓山の日記⁽⁶⁾を中心に考察する。日記は全部で10冊あり、各巻の構成は以下のとおりである。

- | | | | |
|----|---|----|------------|
| 巻1 | 文政2年(1819)9月～12月 | 巻2 | 文政11年2月～4月 |
| 巻3 | 文政11年5月～7月 | | |
| 巻4 | 文化14年(1817)4月～7月、10月～12月、文政元年正月～11月、
文政2年5月～7月、雑記(「撰播遊覧記」、御触書写しなど) | | |
| 巻5 | 天保元年(1830)正月～5月 | 巻6 | 天保元年5月～12月 |

卷7 天保2年正月～5月

卷8 天保2年6月～10月

卷9 天保3年正月～5月

卷10 天保3年5月～8月

2. 京都の花戸(植木屋)

表1に、日記から、京都の花戸(植木屋)の情報及び花戸が店を出したとおぼしき寺社の情報を掲げた。夜店など植物を販売する場としては、東寺が最多で8件を数え、そのほか松原不動・東本願寺・錦菅神宮にも植木屋という場が提供されていた点がわかる。

年	月日	記事	場所	花戸	巻
文政11 (1828)	4・13	千本花戸にてシマツクモ求	千本	—	1
	4・21	東寺へ参礼。植物、ヤナギ艸〔黄花／モチ出〕。白山産唐松サウ〔葉ハ大抵オミナメシニ似タリ。白山也〕。千葉氏ノサメ。素馨〔二錢五分〕。松尾ヘラクル品。琉球黄桜〔卅〕。ムサシ鐘〔廿〕。フウラン〔廿〕。黄芩サウ〔廿／二根〕。	東寺	—	2
	7・27	山キシ〔小葉茸良、花戸名。予云円葉ナリ〕。	—	—	3
天保元 (1830)	2・21	東寺へ参詣。日光カナメ。葉幅壺分余、長サ壺寸余。互生ス。居止(ママ。鋸齒)アリ。(図略)。凡ソ如此。細花、葉間ニタレツク。アセボノ変リモノ。葉ノツキ、トベラニ似タリ。サキ、花ツク。	東寺	—	5
	3・25	花戸〔芫花、白頭翁、東キク〕。	—	—	5
	閏3・21	東寺へ参拜。花戸一見。黄アザミ、鬼シバリ、雪モチサウ、ムサシアブミ、カヤラン等也。尋常ノアザミ、ヒラジク、花形扇形也。	東寺	—	5
	閏3・25	夜店。大カノコサウ〔花〕、白前〔花〕、薊〔黄色〕。	夜店	—	5
	閏3・29	午後、薬太へ向。(中略)苑中、ヲキナラン、甘草、日光黄連、ツルカシワ。キンモクセイ、丹桂〔花戸〕。	—	—	5
	4・11	夜店。シマカマ、シマアシ、黄芩サウ、拳参、アサモミヂ。	夜店	—	5
	4・14	夜、御池花店。シマガマ、ウヅ(烏頭)、南天、金柑垂生、実色朱ノコトシ。	御池花店	—	5
	4・17	夜店。蒲、黄精シマルモノ、白アザミ。参ニマトエル兎絲、苦参ツキツカス。	夜店	—	5
	4・18	夜、六角花肆。シマガマ。	六角花肆	—	5
	4・28	夜、松原不動参拜。花戸品物、ヲボロスギ、タケラン。	松原不動	—	5
	5・23	サヤ丁花戸来ル。近日洗(ママ)レキタルヨシ。	サヤ丁	—	6
	5・23	花戸卯八ニテ一見。イツキ、杜衡数品、イブキタカラカウ〔花〕、イハタハコ〔花〕、岩カネ〔花〕。	—	卯八	6
	6・3	高倉五条辺ノ人、藪下辺ノ花戸ノサシヅ。ノテツセン(傍点)江州ニ産ス。頭痛・齒疼ニモチユ。葉円シ。カキニマトウ。真物ヲミズバ不詳、答フ。愚按ニ、フツクサ齒疼ヲ治ス、此ナランカ。	藪下	—	6
10・19	竹屋小川西へ入北側花戸松平息。	竹屋	松平	6	

年	月日	記事	場所	花戸	巻
天保2 (1831)	5・13	香重にて、石品箱ニツ、草木写生六巻着色ミゴト也。ワンシユノ花アリ。頼オク。千年蕉ノ花写、モト原在中也。サフラン図藏。東本願寺并花戸辰二郎云リ。唐劉寄奴苗、イラコニアリ。	東本願寺	辰二郎	7
	5・21	東寺拜礼。花戸南側而已也。ヒラギ〔ヘリトリ〕、イブキ宝香〔ファイリ〕、水引艸〔ファイリ〕、万年青〔ファイリ〕、シキミ〔ファイリ〕、紅オモト〔白花三并根モトニアツマリツク、花附ハ両方ヨリイビツニツ、ム。青シ〕。サクラン、〔花付〕、美女ヤナギ〔花〕。途中一見。女貞〔花〕、メタラヤウ〔花〕、サギサウ〔ヘリトリ〕、仙人指甲蘭、名古蘭〔多ク持出〕。穀精艸〔一品〕、旋覆花〔紅花〕、岡崎千葉蔵。	東寺	—	7
	7・19	池之坊入来。メドハギ、コマツナギ腊葉。正名申遣。	—	池之坊	8
	7・19	黄花草履、唐タネ也。人形艸。紫背、花戸源二郎ウユル。	—	源二郎	8
	8・3	婢女十四義〔カネ〕。出入花戸順助紹介也。	—	順助	8
	天保2 (1831)	8・15	山厓使。ミツフテ〔花戸名〕、紫花穂ヲナス。答ミゾトラノオ。	—	—
8・21		東寺参拝。花戸品、石葦、ファイリ。ホソバアヲキ。木セイ、キレコミアラク、二三葉白色ノモノマジル。ヒアフギ、不扁。南天ノカハリ三品、高サ五寸斗ニテ数葉出ル也。黄芩サウ。ハシカミ。茉莉、花ツケリ。	東寺	—	8
天保3 (1832)	正・21	東寺参拝。花戸源二郎店。バラ、細葉モノ。花ニツケイ、花付。馬蹄石、大ナルモノ。石ニヒヤウタン形ノモノ。	東寺	源二郎	9
	4・27	妙見山ニ登リ、吉川ニ宿ス。撰州地也。登ル人名、野拙、深海兄弟、奥道貞、門人三輩、手代利八、花戸与市。	—	与市	9
	5・21	東寺拜詣、平田景韶同伴ス。池田花戸順覧ス。ファイリモノ多シ。フジマツ〔チリメンマツト云〕ノ葉サキマガルアリ。紅オモト、シマニナルアリ。	東寺	—	10
	6・5	大宮出水上ル東側、花戸、松平〔七十五〕タヅヌ。ハワ文サウ、キンバイ艸、金魚サウ、日光黄連、徧黄茈、竹ラン、ケイビランモトム。百五十穴。外、ベツカウラン、紅苺、ヒメイズイ、ファイリカキトヲシ、タヅサウ。	大宮出水上ル東側	松平	10
	6・13	大宮出水上ル花戸松平入来。過日之竹ラン、并ケイビランタツサエ。料百五十穴。先ノ小葉ノ景天五十穴。貳百穴与フ。佳茗煎シカエス。(中略) ヨメナノ葉ノキル、モノヲ、ナツカウライト云テヒサゲ。花戸松平。	大宮出水上ル	松平	10
	6・25	夜、錦菅神宮拜参。花戸品、仏虫草〔銀辺〕、水ウルシ〔銀辺〕、野牡丹、鬼女ラン、紫背ノ大文字艸。	錦菅神宮	—	10
	7・17	チャボノフヂナデシコ、出水花戸ニアリ。	出水	(松平)	10
	7・20	花戸恣平ヘユク。	(大宮出水)	松平	10
	7・21	東寺三、花戸五軒。	東寺	—	10
	8・7	花戸、カウモリツタ、トウテイラン〔花〕、吉更(桔梗)ラン、白吉更(桔梗)、ルリ尾尾。	—	—	10
	8・25	花肆源二郎店、シマ井、コ克蘭。	—	源二郎	10

表1 『皓山日記』に見る花戸 ※〔 〕は割書、()は筆者による補注

まず驚かされるのは、植物の種類豊富さである。表1の植物だけで114種、重複を除いても102種であった。そして注目すべきは、当時「奇品^{きひん}」と呼ばれた変異種の多さである。「フイリ(斑入り)」や「シマ(縞)」という斑入り葉類が13件、「ヘリトリ(縁取)」や「銀辺」という覆輪が4件、その他の葉変わりが4件、チャボとも呼ぶ矮性が4件、花の色変わりが3件、枝の垂下が1件、変異は不明であるが「変りモノ」とあるのが1件、合計30件もの変異種が、当時植木市や植木屋という場で、身分の別なく誰でもが購入可能であった。この点は、従来いわれていた、「奇品愛好」が好事家や武士に限定される説とは矛盾する特徴であり、いずれ稿を改めて報告したい。

3. 本草学者の園芸の意味

『皓山日記』には、日々の園芸の様子がよく記録される。すべてではないが以下に、特徴的な内容を紹介する。日記で最も多い植物の記事は、贈答である。植物の形態は、種子、腊葉(押し葉)、盆栽(鉢植のこと)⁽⁷⁾、切り花、枝、苗など様々である。

皓山から贈る場合で目立って多いのが、木槿である。

渡辺ヘソコベニ花貳朶オクル。(中略)香林庵、常楽寺、出雲寺。ムクゲ約ス。前カド白紅ノ兩種アリ。当時無ヨシ。(天保元・5・20)

というとおり、底紅のものと「前カド」の2種があり、花の時季には複数の知人に、おそらく枝の状態で贈っている。さらに、

盆栽ムクゲ咲。単弁ニ変ス。(天保3・7・27)

とあり、八重が単弁に変化したという盆栽の記事もあった。盆栽(鉢植)に仕立てた理由は、この場合判然としなかったが、次の例により推測できる。

山本物品会ニ付、盆栽遣ス。人足甲内荒モノ屋朝間頼。品物七種。丹州宇治田原大葉金星草、ハスノハカツラ、三葉黄連、シダ類[岐業者]、兎尾尾之類ノモノ、トウテイラン之類ノモノ、芹葉銀辺ノ者、外乾品。(天保3・5・24)

ここでは、「山本物品会」すなわち京の本草学者・山本^{ほうよう}亡羊の読書室物産会に出品するため、人足町内の荒物屋、朝間という人物に依頼して、大葉金星草、ハスノハカツラなど7品の盆栽そのほか「乾品」(押し葉)を会場に持参し

ている。庭木では動かせないが、鉢植の形態であれば運搬が可能である。運搬の目的は、本草学者ならではの物産会、つまり展示会兼研究会に持ち込むためであり、さらには鑑定にも利用されたと思われる。(8)

皓山の側から近い人物へ贈った植物には、「遣」「オクル」「モタセ(る)」「アグ」「メグミ」などある文言から判明し、それは、「牽牛苗」や「芒」など一般に愛好される植物もあるが、多くは「決明苗」「夏草冬虫(冬虫夏草)」「伊吹細辛苗」といった薬草であり、さらに、「ギボウシフイリ」「班入特生天門冬」「砂引(斑入り模様的一种)白ミツ二盆^(ママ)」など、斑入り品も多くを占めていた。

一方贈られた例は、「メグマル」「到来」「オクラル」「モチカエル」などあり、植物は贈った場合と同じく「胡枝花」「菊」などの一般的な植物はわずかで、多くは薬草であり、「加州黄連苗」「紅毛石決明」「日光トウカラシ」「伊吹シカミヨモキ」など京都以外が産地の珍しい植物が多数を占めていた。これは、皓山が本草研究会や薬草鑑定などを通して、他地域の人物と交流していた証拠である。

薬草鑑定を如実に示すのが、次に挙げる史料である。皓山の随筆『陶陰雑



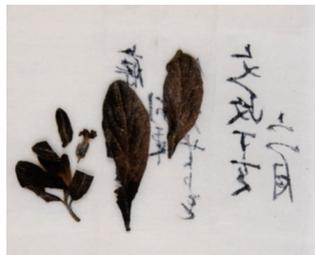
①



②



③



④



⑤

抄』⁽¹¹⁾巻6には、「藤井有隣ヨリ不審押葉」とあり、6点の包紙と腊葉が挟み込んであった。⑥は、①～⑤の包紙全体を包んでいた紙で、図①～⑤がその腊葉の実物である。包紙には次のとおりの覚書があった。

- ①「因州産／文政丁亥／六月」「藤井有隣／到来／押葉／詳ナラズ留置」
- ②「因州方言／イツ、バ／従藤井有隣落手」(朱筆)「文政丁亥六月」(朱筆)
- ③「文政丁亥／六月」「藤井有隣／到来／桔梗ト申遣」
- ④「藤井有隣／到来／ハマフサト申遣」
- ⑤「因州従富士井／落手」「葉両对方茎／山蘭 愚考／文政丁亥六月」(朱筆)
- ⑥腊葉なし。「因州／イツ、バ押葉／有」(朱筆)

これらにより、文政丁亥(文政10・1827)年6月に因幡の藤井有隣から皓山に届けられたとわかる。藤井有隣は、翌文政11年5月2日にも皓山に腊葉の鑑定依頼をしている。日記では、天保元年5月24日「藤井有隣上京。因州御屋敷滞留、三年許修行ノ由。医家書付一見。」とあり、同3年3月23日「藤井有隣入来。暇乞。明日帰国。」とあるので、約3年間京都で医師修業し鳥取へ帰国した。ただし、享和元年(1801)、尾張の本草学者・水谷豊文の「知多採葉記」⁽¹²⁾中の植物に「藤井有隣ニアリ」との注記があるので、医師修業以前から本草の素養はあったと考えられる。こうした人物に鑑定を依頼されるほど、皓山の知識が確実であったとわかる。そして、実物の葉で鑑定するこの行為は、師の蘭山と同一であり、本草学研究のための植物知識を皓山が師から受け継いでいたことを物語る。

また、本草学者らしく薬学についての記事もあり、「世医、カハラバ、コヲ白蒿ト云フ。カナシイ哉。(天保元・4・19)」という、医師の無知についての素直な感想や、南天栽培法と兎絲子(ネナシカズラ)の薬効を次のとおり記す。

南天、茶カスヨシ。葉不大先ツク^(ママ)」。酒ヲカケルヨシ。兎絲子ノツルノ汁ヲ酢ニマゼ、チイボニヌリオク。能治ス。植嘉手代伝方也。(天保元・5・24)

南天に茶かすや酒をかける、あるいは兎絲子の汁と酢を血いぼに塗ると治るという秘伝を、「植嘉」という人物、おそらく植木屋の手代から伝え聞いている。

皓山は、その庭も豊富な植物で満ちていた点は日記の随所より判明するが、天保元年9月10日には、

水口入来、東苑内採葉之義、御頼也。一品尋也。木ヒヨドリジヤウゴ也。

皓山の庭内を「採葉」(葉として採取するのが本来の意味であるが、植物を採集し、あるいは特徴を書き留め写生する行為も採葉と呼んだ)したいという者もあらわれ、植物の種類豊富な豊富さ、珍品の多さは、当時世に知られていたのである。

4. 日々の園芸の記録

日々の園芸では、植え替えの記事が多い。興味深いのは、植え替えの際に気が付いた点を皓山が書き留めた内容である。例えば、

木曾産ワラヒニ盆ウエカユ。苗辺へヨリ中央穴ナシ。(天保元・5・21)

と、蕨を植え替えたのは、苗が「辺」つまり外側へ寄り、それは中央に穴がなく外側にある形の鉢であったからだという。あるいは、鉢植の掃除を行い、ついでに植え替えたという記事「盆栽掃除。ツククサ、青シソ、日光一種ノクサ、トウテイランノハ、ウエカユ也。(天保3・4・19)」や、植えるにあたり、葉があるものは花壇へ植え、葉がないものは鉢植にしたという「サイハイサウ花壇へ栽、葉ナキハ盆栽。(天保2・4・24)」や、地植えの植物を掘ってその土を運んだ「早朝ヨリ、ヲモテ栽物クヅシ土ハコビ。(天保2・4・15)」というはおそらく土を再利用する目的と思われ、逆に鉢植を地植えにし、その鉢に別の植物を植えた「馬蘭鉢栽、南高堀ノ旁へウユ。アトエ、竹ランヲウユ。(天保3・6・16)」など、日常の園芸の様子が具体的にわかる。

同様に虫害も記録され、天保2年5月24日に贈られた青シソが、

アヲシソ貳盆、虫付。葉網ノ如ク黒腐ス。壺盆、穂イデス。貳盆、穂漸ク出ントス。右、十八日用也。(天保2・7・20)

と、詳しく観察する。また、次に挙げる例は、その対処法についても書かれる。

桂葉ノ正中ニへバリ付自宅挑草香盆ニウツミオク。青虫ハモチカエル。

(中略)松ニ多ク毛虫。角倉松ニ懸ケツク。種樹家ニ尋ベシ。(天保2・10・2)

桂の葉の中央にへばり付いた虫を自宅の挑草香の鉢に埋め、青虫は持ち帰り、本草学者にとって虫も研究対象であった点を示す。さらに、松に付く毛虫については「種樹家」、この場合は植木屋に尋ねるべしとして、自らが知ら

ない園芸知識を他者に求めている点も判明する。

さて、近世園芸の特徴として紹介される「奇品」の語は、近年変異種に限定されて用いられるが、筆者は文字どおり珍しく稀少な植物（植物以外にも用いるが）を奇品とし、これを積極的に集めたのはほかならぬ本草学者だと考える。以下では、その一例として相思子を紹介する。日記の天保3年6月7日には、

伊良子云、長崎ヨリ取寄スル相思子、多クマク。ウチハユ。近内案内アルヨシ。以前ノハ木部ヲ落手。壺ハ畑柳泰落手。新語ニ、蔓生ノヨシミエタリ。

と、長崎より取り寄せた相思子の種子が生長したので、近いうちに披露するとある。その4日後の11日に実際に見た記事が詳しく記載される。

南方障子ノキハ貳盆、噂ノ相思子也。葉ハ合歡ノコトク、数葉ツクヲ一葉トス。壺盆十二枚、葉両対、上ハ十四枚ヲ一葉トシ互生ス。一本ニ四枚斗リツク。モトニ皮対シツケリ。壺盆、下ヨリ互生。下ノ葉ハ十六枚。ソノ上ハ十二枚、十四枚。惣高サ、四五寸斗リ也。廿年池田ノ木部宗七、二本持登リ、壺ハ畑柳臺へ、壺ハ伊良子へ、ソノ後、タエテナシトカタレリ。明和甲申(明和元・1764年)ノ年、枯葉墨匣ニオサムヲミセラル。書付ニ、高サ六寸、壬冬カル、ヤウイヘリ。(天保3・6・11)

この1か月半後の、7月26日にも

伊良子ユキ、相思子二盆、葉は昼、ヲモテトヲモテト相合ス。夜ハ、ウラトウラト合ス。七時ヨリ、ソロヘ合スル也。葉数上ニテハ卅二枚、下ニテハ廿四枚也。

と、尋常ならざる関心をもって詳細に記録する。相思子は、江戸の本草グループ「楮鞭会」^{しやべんかい}による天保6年(1835)成立『珍卉図説』^{ちんきずせつ}にも登場する。ここでは、平賀源内や岩崎灌園でも枯らしてしまっていたが、このたび花実を見ることができれば「園課ノ一大愉快」と期待に満ちた文章であった。⁽⁹⁾しかし京都では、長崎から来た相思子を、江戸より3年も早く栽培していた。この相思子の例は、江戸と京の本草学者同士が、情報を共有していない事例としても興味深い。⁽¹⁰⁾

おわりに

以上、京都の本草学者・水野皓山を例に、「本草」という学問と、「園芸」という技芸の関連性がわかる資料を紹介した。今後、日記の記事と、物産会に出品された植物の動きを追跡すれば、さらに本草研究の手段としての園芸の役割の特徴が浮かび上がって来ることと予測される。

注

- (1) 筆者は、かつて岩崎灌園について、園芸文化史上での位置づけをし(『十九世紀日本の園芸文化』、思文閣出版、2006)、近年、「本草から見た園芸文化」(江戸東京博物館図録『花開く江戸の園芸』2013所収)などにおいて、本草学から見た園芸文化への視点を意識して執筆した。
- (2) 遠藤正治「水野皓山と山本読書室」『日本医史学雑誌』第30巻2号、1984。
- (3) 八坂書房、2010年。
- (4) 「小野蘭山の本草学と衆芳軒における門人指導」。前掲(註3)『小野蘭山』所収。平野はほかに「小野蘭山『採薬記』の成立と転写系統の検討—『常野採薬記』『甲駿豆相採薬記』—」(『駿台史学』124号、2005)において、水野皓山が筆写した採薬記に言及する。
- (5) 「松岡恕庵から小野蘭山へ—その歴史的転化の一端—」。前掲(註3)『小野蘭山』所収。
- (6) 表題『皓山日記』。請求記号[14-57]。
- (7) 近世においては、「盆栽」と書いて鉢植の意で使用した。拙稿「江戸の鉢植と盆栽」(大宮盆栽美術館『コレクション名品撰』2010所収)参照。
- (8) 天保元年5月15日、渡辺清吉が届けた蛇眼草と杜衡の盆栽を翌日、返却している。こうした記事は多く、同年4月2日堀玄仲は、翻白草の鉢植と白英の葉を1日だけ皓山に預けている。
- (11) 西尾市岩瀬文庫蔵[15-85]。写本10冊の内。
- (12) 『採草叢書続編』所収。名古屋大学附属図書館蔵。[伊/W499.9/Sa/2]。
- (9) 拙著『ものと人間の文化史152 温室』(法政大学出版局、2010)第3章で紹介したので省略する。
- (10) 江戸に居住した旗本。馬場大助の『舶上画譜(遠西舶上画譜)』(東京国立博物館

蔵[和-255])巻1には、次のようにある。

相思子 トウアツキ

天保年中舶来ノ種ヲ予ガ園中ニ下シテ生ス。(中略) 嘉永三戊年夏、曲^(ママ)真瀬子園中ニ初テ花ヲ開ク。(中略) 其後弘化二乙巳年、清舶齋ス竜腦ノ櫃中ニ混合シ来ル。往古ヨリ竜腦中ヘ相思子、大紅豆、海紅豆等ヲ混交シ来ルコト、全ク其香ヲ不耗ナラシムルニアリ。肥前長崎ノ野田青葙、下種シテ生ルモノヲ真写シテ予ニ贈ル。是、同物也。

本記事の前半部分、馬場が種子を蒔き、曲直瀬養安院の園内で初めて花が咲いたという内容は、同じ馬場の著書『群英類聚図譜』(武田科学振興財団杏雨書屋蔵[杏-3139])巻18にも記述がある。